
日本国民参加型ゲーム

two

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本国民参加型ゲーム

【Nコード】

N0983Z

【作者名】

two

【あらすじ】

平和な日本で突然始まった殺人ゲーム！！

ゲームクリアの条件は・・・○○○

何人生き残れるのか？

それともゲームオーバーとなってしまうのか・・・

4月1日 カズヤ宅

10:00

けたたましいアラーム音が家中に鳴り響く。

こんな早い時間でだるいが早く起きて準備をしなければ。
今日は絶対に遅れることはできない。

大学は春休み中なので、いつもは昼過ぎまで寝ている。

そんなおれだが、今日は早起きだ。

ユイとのデートの約束があるからだ！

…まあ、まだ付き合っちゃいないが…今後付き合えればいいな…と。

おれはカズヤ。

大学3年生になったばかりの20歳。
趣味は野球。

野球サークルに所属。

バイトして遊んでの、典型的な大学生活を送っている。

今日のデート？のお相手はユイ。

大学2年生。

サークルの後輩。

綺麗な黒髪が印象的だが、おっちょこちょいで守ってやりたくなるような可愛い子だ。

… 12時に渋谷かあ、がんばるぞ！

2

4月1日 渋谷八チ公前

12:03

やばい、まさかの遅刻…ぎりぎり間に合うと思ったが微妙に間に合わない…

せっかく早く起きたのに何やってんだおれは…

まだ電車の時間まで余裕があると思ってコンビニに立ち寄ったのがいけなかった…

まだ読んでない週刊誌が目につき、ついつい立ち読みし始めたら、電車に乗り遅れてしまった…

前の彼女と別れた原因がこれだ…

…全然おれ成長してないよ…

「ごめん、ごめん。ちょっとバス遅れてて、一本電車乗り遅れたちやったよ」

…しょうもない嘘をつくところも全く直らないか…

「だいじょうぶですよ。今日映画ですよね？私、久しぶりの映画です

「こい楽しみにしてたんですよ」

屈託のない笑顔がおれの心拍数を押し上げる。

…がんばるぞ！

3

4月1日 渋谷某スポーツバー

19:10

映画を見て、しばらくぶらぶらした後、おれはユイとスポーツバーへ向かった。

おれとユイの共通点は野球好きということ。

プロ野球が開幕し、一緒に野球を見れると思い、ここを選んだ。

「あのシーンよかったよね。思わず涙腺ゆるんだよね」

「そうですね！予告見た時からどうなるか楽しみだったんですよ。まさかの展開で最後はすごい感動的でしたよ」

今日見た映画は、ユイが前から見たいと言っていた恋愛物だった。

正直、おれはアクションのほうが好きだ。

ユイを落とすためにおれは好みでもない映画を見て、柄にもないことをしゃべっている。

（さて、これからどうするか…サプライズを準備しているがどのタイミングかが大事だぞ）

ガガッ、ガガガー、ガガー

急に店内の野球中継をしていた巨大スクリーンの画像が乱れた。

そして、途切れた。

ザー――

ザー――

画面は砂嵐になってしまった。

カタ、カタカタ、カタカタ、カタタタタタタタ…

砂嵐の上に何か赤い文字が浮かび上がる。

『日本国民参加型ゲーム』

「日本国民参加型ゲーム？なんだこれ？」

店内の客はみんなおれと同じリアクションだ。

店のなんかのイベントか？とも思ったが、従業員の一人はリモコンのボタンをあちこち押しており、

もう一人の従業員は配線の確認をしているのを見ると店のイベントでもないことがわかった。

「おいつ、ここにも同じの出てるぞ！」

客の一人が自分の携帯を見せながら叫んだ。

おれも急いでジーンズの左ポケットから携帯を取り出す。

よほど慌てていたのか、携帯がうまく手に収まらず、携帯を落としてしまった。

床に落ちた携帯。

その画面にも…やはり…

『日本国民参加ゲーム』

砂嵐を背景に赤い字。

ユイの携帯にも同じものが…

「キヤー！、何これ？なんなのこれ？気持ちわるい…」

見れば見るほど薄気味悪い映像だ。

砂嵐をバックによく日本のホラー映画で使われるような字体。

赤い文字からは少し血が流れているかのように見える。

その文字、言葉が砂嵐の中、震えるように小刻みに動く…

微かに消えてはまた網膜に焼き付けんとばかりに濃く浮かび上がる…

そこへ少し前に会計を済ませた常連客の一人が、ドアを叩き破る勢いで戻ってきた。

「外が大変なことになってるぞ！」

このバーは地下にあるので周りの状況はよくわからなかった。

おれは席を立ち上がり地上めがけて階段を駆け上がった。

地上に出たおれを待っていたのは、

『日本国民参加型ゲーム』

『日本国民参加型ゲーム』

『日本国民参加型ゲーム』

『日本国民参加型ゲーム』

……

……

……

正面のビルの巨大スクリーン、

店頭に面したハイビジョンテレビ、

道行く人々の携帯、カーナビ……

恐ろしいあの映像が辺り一面を覆い、ネオンが輝く街を不気味な雰囲気に変えている。

ジー、ジジツ、ジジツ…

雑音と共に『日本国民参加型ゲーム』の字が消えて行く…

カタ、カタカタ、カタカタ、カタ

代わりに出てきた文字は、

『一億三千万分の一が犯人』

それと…画面の右上には小さく…

『130,000,000/130,000,000』

…と…

ただ…、これは…、ゲーム…、です…

僕も…、何も…、しないで…、殺されるのを…、待つわけでは…、
ありません…

僕は…、あなたたち…、日本国民…、全員を…、殺します…

あなたたちが…、僕を…、殺すのが…、早いか…、僕が…、日本国
民を…、全滅…、させるのが…、早いか…

ちなみに…、現状を…、見ても…、わかるように…、僕は…、すで
に…、日本の…、全ての…、電波を…、支配…、しています…

衛星も…、ジャック…、しました…

画面の…、右上を…、見て…、下さい…

今…、

『一億…、三千万…、分の…、一億…、三千万…』

に…、なつて…、います…

僕が…、一人…、殺して…、いく度に…、分子が…、一ずつ…、減つて…、いきます…

『一億…、三千万…、分の…、一…』

に…、なるまでに…、僕を…、殺すことが…、日本国民の…、皆さんの…、ゲームクリアの…、条件…、です…

逆に…、それまでに…、僕を…、殺せなければ…、ゲームオーバー…、です…

ドグォゴォー
ンゴゴーッ
ン

「キヤー、キヤー」

渋谷のあちこちで爆発が起き、爆発音と悲鳴が入り乱れる。

おれの目の前でも爆発が起きる。

閃光に目がくらむ。

手が触れるとヌメヌメとするこの感触、何かの生々しい塊、

目が開かなくとも自分の肌を通して伝わる現実…

…逃げる…逃げる？

…どこに？…どうやって？

爆発は至る所で続いている。

…とにかく落ち着け、落ち着け、現状を把握しないと…

なんでここにいいのか？…

何でここまで来たのか？
…

誰とここに来たのか？
…

… 落ち着け、 落ち着け…

ギュツと誰かがおれの手を握った。

「助けて!!」

おれは我に返った。

「ユイ！」

そうだ、おれはユイと渋谷に来ていたんだ。

今、おれのやることはユイを連れてこの地獄から逃げることだ。

「ユイ、逃げるぞ！とにかく走るんだ。あと絶対におれの手を離すな！」

爆発は収まる気配はない。

遠くの方からは火柱があがり、辺りは黒い煙が立ち込めている。

人間は将棋倒しになり、人が人の上を逃げている。

足元は血の海となり、人間だったものが辺り一面、折り重なるように散らばっている。

「ユイ、目を開けるなよ！」

おれはユイを守る！その一心だけで、無我夢中で逃げた…

12

4月1日 渋谷隣接郊外

21:35

どれだけ走り続けたか…

渋谷からはだいぶ離れたようだ。

周りには同じように逃げて来た人達が疲れ果てて座り込んでいる。

ユイを見ると、ユイもこれ以上走るのは限界のように見えた。

「ここまで来ればだいじょうぶだろうからちょっと休もうか」

ユイは黙って頷いた。

渋谷の方角を見ると夜の空が赤くぼやけて見える。

もう爆発音は聴こえない。

代わりに救急車のサイレンの音が微妙に聞こえてくる。

「オエッ」

少し前まで、あの悪夢のような場所いたと思うと吐き気がしてきた。

ユイを見ると、ずっと黙ったまま、しゃがみ込み下を向いたままだ。

あれほどの惨状…

人間はあんなにも簡単にバラバラになってしまうのか…

人間からはあんなに多くの血が流れるのか…

人間の悲鳴とうめき声が頭の中で繰り返し繰り返し再生される。

きっとユイもそんな状況なのだろう。

こんな中、意外におれは平常心を保てた。

目の前で起きたことを思い出すと気持ち悪くなるが、自然と頭は冷静だった。

この方向に逃げてきたのもただやみくもに逃げてきたのではなく、

暗い方、静かな方を選びながら走ってきた。

携帯を開くと好きなグラビアアイドルが水着姿で微笑んでいる。

画面は通常に戻っていた。

ただ画面の右上には、

『 1 2 9 / 2 6 1 / 5 5 0 / 1 3 0 / 0 0 0 / 0 0 0 』
∴ 1 2 9 / 2 6 1 / 5 4 9 ∴ 1 2 9 / 2 6 1 / 5 4 8 ∴ 1 2 9 / 2
6 1 / 5 4 7 ∴

これだけはいつものおれの携帯とは違った…

『ウッド・ベル』

そいつの話が本当なら…これだけのことがあったのだから、本当なのか？

この画面の右上の数字が表しているものは、あの惨劇で死んだ人の数を表しているのだろうか？

すでに80万人…？

「ほら、渋谷も大変なことになってるみたいだよ」

「あら、ほんと大変ねえ。この辺りにいる人達は渋谷から逃げてきたのかしら」

近所の人がベランダから渋谷方面を見ながら話をしている。

渋谷があんなことになっているのに、日本人は自分のことでないと完全に他人事だ。

ただ、
“ 渋谷も ” という近所の人の言葉が気になった。

「すみません、今“渋谷も”と言っていました、他にも何かあったんですか？」

「そうよ、今いろんなところで大変みたいよ。テレビは今みんな“同時多発テロか？”って騒いでて。

渋谷以外でも、札幌や仙台、新潟、長野、名古屋、大阪、広島、那覇と各地でテロが起きてるのよ。

『ウッド・ベル』とか名乗ってるやつが犯人らしいけど……」

ブザー、ブザー

急に携帯が震えた。

「あつ、またテレビ砂嵐になったわよ。また『ウッド・ベル』出てくるみたいよ」

いろいろ教えてくれた人は、そう言ってベランダから家の中に戻って行った。

おれは恐る恐る携帯を開いた。

また砂嵐だ…

そこに徐々に大きく映し出された…

『129,081,115/130,000,000』

文字が浮き上がると、またあのヘリウムを吸ったようなふざけた声が聞こえてきた。

「皆さん…、いかが…、でしたで…、しょうか…。」

最初に…、100万…、ポイント…、くらいはと…、思い…、ましたが…、予定より…、やや…、ショート…、しました…。

今現在…、918、885名の…、死亡が…、確認…、されました…。

「ご冥福を…、お祈り…、します…」

…チーン…

「初めての…、ゲーム…、ということでは…、皆さん…、お疲れ…、かと…、思います…。」

今日…、この後…、だけは…、何も…、しない…、ことを…、お約束…、しますので…、

今日は…、ゆっくりと…、お休み…、下さい…」

「ふざけんなよ！なんだよこれ！ゲームってなんだよ！こっちは死にそうになったんだよ！くそっ！」

「…ねえ、…カズヤ先輩、…家に…帰りたい…」

ユイがやっとの声でボソツとつぶやいた。

辺りをみると、逃げてきた人達は、まだ座り込んでいる者もいるが、それぞれ重い足どりで歩き始めている。

まだ混乱している者、現実を受け入れた者…

「そうだねユイ、早く家に帰ろう。ちゃんと送っていくからね」

幸いなことに電車は止まっていたが、渋谷とは関係のない路線のバスは動いていた。

バスは非日常だったおれとユイを日常のように運んでいった。

「一人でだいじょぶ？今日一緒にいようか？」

こんな時だ、別にやらしい気持ちで言ったのではない。

ユイもおれも一人暮らしで、ユイを一人にするのは心配だった。

「…だいじょぶです。今日は本当にありがとうございました」

「ほんとにだいじょぶ？何かあったらすぐ電話してね。すぐ駆け付けるから」

おれ自身一人になるのがちょっと怖い部分があった。

ユイにおやすみを言っておれも一人暮らしをしているアパートへ帰った。

18

4月1日 カズヤ宅

23：36

部屋へ入るなり、張り詰めていた緊張の糸が切れた。

ここはいつもおれが普通に過ごしている部屋だ。

漫画は読みっぱなし、服は脱ぎっぱなし…

おれは朝起きたままの布団がめくれっぱなしのベッドに倒れ込んだ。

…疲れた…

ふと携帯を見ると、着信あり、受信メールありになっている。

ユイからか？

『カズヤ大丈夫？渋谷から少し離れてるから大丈夫だと思うけど、無事ならいったん連絡ちょうだいね 母』

おれは、

『大丈夫だよ』

とだけ打ち込み、送信した。

ユイに電話しようかどうか迷ったが、今日は大変だったね、といった簡単な内容とおやすみ、だけを入力しメールだけで済ませた。

長い4月1日が目を閉じることで終わる。

ただ、目を閉じることで明日になる。

明日以降は何が起きるのか？

次の日起きたら夢だったらいいなと思いつつおれは目を閉じた。

4月2日 高知県 ヒデ宅

10:55

朝からテレビでは、昨日起きた国内9ヶ所同時多発テロの話題しかやっていない。

まあ、当たり前といえば当たり前だ。

幸いといっていいのか、四国ではどこも被害を受けていないが、テレビを見る限り各地かなり悲惨な状況になっている。

2001年のアメリカの同時多発テロの時は、外国ということもあり危機感は全然わかなかった。

自分が住んでいる国で起きたら、頭がおかしくなるだろうと思っていた。

しかし今回、日本でテロが起きたが、自分がその現場に居合わせていないせいか、危機感は全くわいてこない。

むしろ、どんな感じが生で見てみたいという好奇心がわいてきた。

20

…人間ってこんなもんだよな…
とため息をついた。

テレビ画面の右上には相変わらず例の数字がカウントされている。

『128,355,680/130,000,000』

昨夜よりも70万人も減っている。

カウンターは今もなお動き続けている。

この一晩でこれだけ多くの人が苦しみ亡くなっていったということだ。

そして、今この瞬間にもどこかで誰かが亡くなっているということだ。

とにかく自分でなくてよかったと思いつつ、大学のサークルへと向かった。

2
1

4月4日 四国全土

4 : 4 4

いつせいに画面が消え、砂嵐になった。

カタカタ、カタツ、カタカタ

画面に文字が打ち込まれていく音だけがまだ夜明け前の静寂さの中に響く。

『シコクザイジュウノミナサン、

オハヨウゴザイマス。

イマカラ、

シンデクダサイ。

ドクガスヲマキマス。

タスカルホウホウハ、アリマス。

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトヲイノッテイマス。

…デハ…」

カタツ、カタカタ、カタ

「 シコクヘン
」

カタ

22

4月4日 高知県 ヒデ宅

5:15

なんだか外が騒がしい。

昨日も大学のサークルの飲みで、帰って来たのは3時過ぎだった。

これじゃ、眠くても眠れない…。

あまりにも騒々しいので、ヨタヨタしながら部屋のカーテンを開けてみた。

視界に飛び込んできたのは慌てふためく人、人、人…。

車は猛スピードで、人混みの中を走り抜けていく。

「ん？なんだ？」

あまりにも異常な雰囲気だったので、急いでサンダルだけ履いて外に出してみた。
.
.
.
.
.
.

「すみません、毒ガスってなんのことですか？」

「あー、もう時間ないんだよ！携帯見てみるよ！いいから手、離せ！」

…携帯？

男はおれが一瞬手の力を緩めたのを見逃さずに手を振りほどいて逃げて行った。

おれは急いでポケットから携帯を出して開いてみた。

………

昨日まで平穏な生活を送ってきた。

3日前のテロをニュースで知った時も楽観的にしか考えていなかった。

理解するのに数秒かった…

…やばい

初めて危機感が込み上げてきた…

おれはまず一番仲のいいアキオに電話をした。

アキオはまだ寝ていたが、今の状況を説明すると電話口でもアキオの酔いがさめていくのがわかった。

「ヒデ、これからどうするよ?」

「どうするって言われても、3日前のこともあるから逃げないとやばいだよ!」

逃げてる人の話だと、四国から出ればだいじょぶって話だから。アキオ、おまえ車出してくれ!」

「車が…わかった。すぐ準備してヒデんここに迎え行くよ!」

「あと、アキオの車5人乗りだよな?ハセガワとイワキ、マツナミに連絡しとくから3人も頼む!」

「了解、みんな近くだから15分でみんな拾ってくよ!」

20分後、予定より5分遅れてアキオの車がアパートの前に止まった。

ハセガワ、イワキ、マツナミももう車に乗っている。

アキオはある程度荷物を準備していたようだが、他の3人は着の身着のまま出てきたようだ。

おれも荷物という荷物はないが、携帯、充電器、現金、免許、簡単な筆記用具は持った。

あとは小さい頃から肌身離さず持ち歩いているお守りくらいだ。

「ヒデ、急げ！もう道かなり混んでるぞ！」

おれが車に乗ると車はすぐに発進した。

「道だいぶ混んでるよ。“毒ガス予告”から30分くらいしか経ってないのにやっぱりみんな混乱してるよ」

「くそ！歩道通れよ！避けてくめんどくせえな！」

「ってか、信号意味ないね。人も車もチャリもみんな信号無視だよ。車線も関係ない感じだね」

「しょうがないでしょ。みんな自分が逃げるのに必死なんだよ」

「まあ、おれらもそのうちの一人だからね…」

車の外を見ると、30分前の比ではない。

なかなか車もスピードが出せない。

人混みを掻き分けてやつのことで交差点を曲がる。

ふと、急いで駅に向かっている人の中に知った顔が見えた。

同じサークルのタカハシだ。

普段から妙なテンションで無駄に絡んでくる奴で、正直嫌いな奴だ。

おれは一瞬目が合ったが、気付かない振りをした。

しかし、向こうは気付いていた。

人の間をぬって、おれらの車によってきた。

ドンッ、ドンッ、ドンッ

「おい、おれも乗せろよ！ドア開けろよ！おまえらだけ車で逃げん

のはずりいぞ！早く開けろよ！おいっ！」

勢いでマツナミがドアを開けようとした。

「マツナミ開けるな！」

アキオが叫んだ。

「この車は5人乗りなんだ。あいつは乗せられない」

「えっ？でも…」

「ただでさえ5人乗ると狭いんだ。あいつが乗るスペースはないよ。」

…あとおれタカハシ嫌いだし。

あいついつつもおれらの悪口隠れて言いまくってんだよ！マツナミも知ってんだろ？」

「それはそうだけど…」

確かにアキオが言っているとおりだ。

タカハシはいつも仲のいいおれら5人組の悪口を他の人に言いまくっている。

それだけじゃない。

あいつに何か頼み事をして一度も聞いてもらったことはない。

タカハシはそんなやつだ。

「席が開いてるならまだしも、満席の状態でタカハシを乗せるのはおれも反対だよ」

おれはアキオの意見に同調した。

アキオとおれが反対したことで、タカハシは車に乗せない、ということになった。

マツナミもハセガワもイワキもタカハシを普段からよく思ってたせいか納得したようだ。

アキオはタカハシを無視して、アクセルを踏んだ。

「おいっ、待てよ！待てっ！止まれよ！」

タカハシは車の窓を必死で叩きながら追いかけてくる。

「アキオもつとはやく！」

「速くって言われても、人が邪魔でなかなかスピード出せないよ！」

車はタカハシをなかなか振り切れない。

それどころかスピードが落ちるとドアの取っ手をつかみガチャガチャやってくる。

100メートル程そんなことを繰り返していたが、ドンツという音とともにタカハシの姿が見えなくなった。

すると、急にフロントガラスの上の方からタカハシの逆さまの頭が覗いた。

タカハシは逆さまの状態で顔をフロントガラスに押し付け、フロントガラスを叩きだした。

「わっ、なんだこいつ！やばいどうしょ！」

と言いながらアキオはハンドルを左右に切る。

タカハシも鬼のような形相で、車から振り落とされないようにしがみついている。

しかし、車が一瞬ブレーキをかけた瞬間、タカハシはおれたちから離れて行き、穴に吸い込まれるかのようにあっという間に視界から消えた…

ドンッ、ドゴゴ、ドン、ゴゴッ

シートベルトをしていたおれの身体が2回激しく上下した…

おれは…おれたちは何が起きたのか、みんなわかっていた。

ただ、自分たちがしてしまったことで身体が固まってしまっていた。

アキオはハンドルを両手でしっかりと握ったまま、目を見開き前を凝視している。

おれは固まった身体の中で唯一動いた眼球を使って、ゆっくりとサイドミラーを見た…

仰向けでヒクヒク動いているように見える人間がミラーに映った。

その人間が微かに頭を動かすとサイドミラー越しに目が合ったような気がした。

と次の瞬間、後続の車がその人間を飲み込んでいった…

アキ才は黙ったまま前だけを向き運転を続けている。

後部座席の3人も無言のままだ。

おれも何も話せない…

最後に見たミラー越しのタカハシのあの目が頭に焼き付いたまま離れない。

「なあ、悪くないよな…、…おれが悪いわけじゃないよな…」

アキ才がたまらず口を開いた。

「だって、もう定員いっぱいだから乗れないよな？」

それなのにあいつが車叩いたり、車の上によじ登ってきたり…実際あの時、もうあいつが邪魔で前も見えなくて…」

アキ才は自分のことを正当化するかのように早口でまくし立てる。

おれも重い口を開いた。

タカハシがこうなったのはおれがアキオの意見に同調したからであり、おれにも責任がある。

ここで自分を正当化しておかないと持たないと思った。

「そうだよ！乗れないもんは乗れないんだから、それを無理矢理乗ろうとしてくるあいつが悪いんだよ！

あいつが諦めていればこんなことなかったんだろ？あいつのせいだよ！」

そういつつも頭の中では、サイドミラーに映ったあのシーンが何度何度も繰り返し返されている。

「とにかく今は逃げないと…」

33

6:15

朝起きてから1時間。

もう昨日までとは違う。

『ウッド・ベル』の四国毒ガス予告だけでおれの日常が日常でなくなってしまった。

現におれが乗った車で人をひいている。

この混乱した中で、そのことを正当化してしまう自分がある。

ただ、それよりも今は一刻も早く四国から逃げなくてはならない。

四国を車で出るには、3つのルートしかない。

1つ目は、今治から大島、伯方島などいくつかの島を通り広島に渡るルート。

2つ目は、坂出から瀬戸大橋を通り岡山に渡るルート。

3つ目は、鳴門から淡路島を通り兵庫に渡るルート。

他にフェリーなんかもあるがまず乗れないだろう。

今、高知にいますのでまずは高知道を北上する。

問題は高知道の川之江JCTだ。

川之江JCTがこの3つのルートのどこを選ぶかの分岐点となる。

10:03

「ヒデ、どうする？もうじき川之江JCTだよ。どっちに行く？」

アキオが久々に口を開いた。

こっちを向いた目は徹夜明けのように疲れ切っていた。

「そうだな、正攻法で最短距離に行くか、裏をかいて遠いほうで行くか…」

あと、アキオ、運転代わるから、しばらく後ろで休んでたらいよいよ」

渋滞の中、JCT直前で車を側道に止めアキオと運転を代わった。

おれは運転を代わるのと同時に他の車がどこに向かうのかを注意深く観察した。

ここがポイント、ここを外すか当てるかで運命が変わる。

普段、遊び人の大学生だが妙に頭が働く気がした。

「鳴門で行こう」

渋滞の列に戻るとおれはなんの迷いもなくみんなに行き先を伝えた。

「…鳴門って一番遠いんじゃない？」

みんなからそんな声も上がったが、

「だいじょぶ、鳴門でだいじょぶだから」

というおれのなぜだか説得力のある言葉で一番距離のある鳴門に向かうことになった。

35

19:16

もうかれこれ半日以上たつ。

中身の全くない、異様に長く感じる時間だけが無駄に過ぎていく。

車のステレオから流れるニュースは『ウッド・ベル』のことだけで
もう耳をふさぎたくなる状況だ。

さすがにうんざりしてスイッチを切ろうとした瞬間、カーナビの画面が赤く染まり、そこから血みどろになった文字が浮かび上がった。
きた。

『四時間四十四分』

「4時間44分？4時間44分…なんだこれ？」

血が滴り落ちる文字が頭に焼き付く。

時間が経つにつれなぜだか冴えてくるおれの脳みそが時計に目を向けさせた。

「…残り時間か」

日付が変わるまでの時間…

日付が変わると何が起きるのか？

毒ガスがまかれるのか？

しばらくするとカーナビにまた別の数字が浮かび上がってきた。

『候補者2556285名』

ここでもおれの脳みそは瞬時に候補者の意味を理解した。

「…四国内に残ってる人数か。候補者…」

候補者という言葉が何かひっかかる。

なんの候補者なのか。

ただ、今は言葉の意味を直感で捕らえられるほど感覚が研ぎ澄まされていた。

36

23:16

『四十四分四十四秒』

カーナビの数字がゆっくりと血が流れるように書き換えられた。

よく『四』は『死』だから縁起が悪い数字だとされてきた。

たしかにこの状況でこれだけの四を並べられるとそれを実感するのは容易だ。

『候補者2139952名』

カーナビに浮き上がる数字と候補者という言葉の意味を考えている間に、鳴門大橋まであと数キロの所まで来ていた。

「鳴門大橋だ、もうちょっと、もうちょっとで鳴門大橋だよ。間に合う、間に合うよ!」

アキオが視界に飛び込んできた鳴門大橋を見て叫んだ。

ハセガワ、イワキ、マツナミの後部座席の三人も前に体を乗り出し、アキオを急かしている。

アキオと交互に運転をしてきたおれだったが、ここ2、3時間は助手席でずっと頭をフル稼働させていた。

「候補者……タスカルハウハウ……」

ウッド・ベルの言葉が気になる。

『タスカルハウハウハ、アリマス。』

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトライノッテイマス』

たしかこう言っていたはずだ。

逃げることも、全てではない…

ゲーム…

候補者…

23:25

「くそっ！さっきから全然進まねえよ」

考え込んでいたおれは、アキオの苛立った声で我に返った。

ふと外を見ると鳴門大橋は10分前とほとんど同じ位置に見えた。

ここ10分でほとんど進んでいないようだ。

外を歩いている人にどんどん抜かされて行く。

「ねえ、これ進まないのって前の方の人達が車乗り捨ててってるからじゃない？」

マツナミの言葉通り、車を降りてみると前も後ろも至る所で車から人が出てきていた。

「ちくしょう！車捨てろってことか！？くそっ！」

アキオが悔しがるのもよくわかる。

この車はアキオがずっと欲しがっていた車で先月やっと手に入れたものだった。

しかし、状況が状況なのでアキオもすぐに観念した。

おれらは車をその場に乗り捨て、鳴門大橋へと向かう列に合流した。

車を捨て、うなだれているアキオにマツナミが付き添って歩く。

そんな姿を視界の隅に置きながら、おれは頭の中で反復していた。

…逃げるのが全てではない…

…ゲームに参加できることを祈っている…

「よかった、間に合った、鳴門大橋に着いたよ。早く渡ろう！」

イワキの声が聞こえ、おれはふと時計を見た。

「…23時35分かあ」

40

23:55

『四分四十四秒』

『候補者2067055名』

そろそろと思い、携帯を開くと画面にはそう表示されていた。

「おい、ヒデ。ホントにおまえを信じていいんだろうな？もし違ってたらおれら…」

目の前を大慌てで通り過ぎ、橋を渡って行く人達を見つめながらアキオが聞いてきた。

23時35分に鳴門大橋に着いたおれらは、人の波に流されるように橋へと足を踏み入れようとしていた。

アキオもハセガワもイワキもマツナミも安堵の表情を浮かべていた。

同じように必死で逃げてきた周囲の人達の顔も心なしか明るく見える。

「アキオ、ハセガワ、イワキ、マツナミ。おれを信じてくれるか？」

押し寄せる人の流れの中、おれは4人を呼び止めた。

おれの頭の中は鳴門の大渦のようにウッド・ベルの言葉が渦巻いていた。

この昨日までとは違う世界に危機感を感じながらも同時に好奇心もわいてきている。

頭は幸いにもかつてないほど冴えている。

「逃げないほうに賭けてみないか？」

おれは冷静な口調で言ったが、家から逃げる時に持ち出したお守りをポケットの中でぎゅっと握りしめていた。

結局、おれの予想外の問いを受け入れてくれたのはアキオとマツナミ。

ハセガワとイワキは猛反対し、橋を渡るほうを選んだ。

「大丈夫…、大丈夫だ。…おそらくこっちが正解なはず」

42

23:59

「さあ、何が起きるんだ…」

最後の力を振り絞って橋に押し寄せる人。

もう0時には間に合わないであろう橋から離れた所からは罵声、最後の叫びが聞こえる。

「だいじょぶ…だいじょぶだ…」

携帯の時計はデジタル式の為、23時59分の何秒まで進んでいるかはわからない。

変わる、変わると思いながらも表示されている数字は59分のままだ。

59、59、59、59、00

「あつ…」

プシュー

プシュー

プシュー

橋の上に煙が立ち込める。

43

一気に橋方面の視界が悪くなる。

煙に覆われていく中、人が倒れていくのが見えた。

正確にいうと人混みでそれぞれ身動きが取れないため、真下に崩れ落ちていく感じだった。

『ゲームサンカニンスウ、

ヒャクキュウジュウゴマンヒャクジュウハチメイ。

マズハ、オメデトウ。

サツソクデスガ、

ゲームセツメイデス。

イマカラ、

ヨンジウヨンニチ、ヨンジウヨンプン、ヨンジウヨンビョウ
デ、

シコク、ハチジウハツカシヨ、

ギャクマワリ、シテクダサイ。

ジカンセイゲンガ、

アリマスノデ、

イソイデクダサイ。

…デハ…』

44

4月5日

0:15

「橋にいた人はみんな死んでるよ」

毒ガスの霧が少し晴れてくると、絶望的な光景が目に入ってきた。

目の前に映る橋は命を繋ぐくもの糸だったはず。

その糸に縋り付いてきたものに容赦なく浴びせられた毒ガス。

どれも苦しみながらも、その場から逃げ出すこともできずに一塊となつて死んで行ったのだろう。

「ヒデ、とりあえずおまえを信じて良かったよ。

ハセガワとイワキ……あいつらのことは忘れよう」

黙ったまま橋を見つめるおれの肩にアキオが手を掛けた。

「
…ああ
」

おれはアキオに内心を悟られぬよう下を向いた。

45

『125、077、275/130、000、000』

『参加者1950118名』

周りの人の話によると、橋を渡って本州へ辿り着いた人も原因不明だが次々と倒れて亡くなっているという。

おそらくそれぞれの橋を渡る際に何らかの毒物が仕掛けられていたのだろう。

故郷の四国を捨て、真っ先に逃げ出したものは死に、とどまったものが生き延びた。

「アキオ、マツナミ。おれらの選択は正しかったみたいだよ」

「まあな、あのまま橋渡ってたら死んでたもんな」

「いや、そのことじゃない。今始まったこのゲームのことだよ。ゲームクリアの条件はなんだっけ？」

おれは下を向いたまま、顔がにやけるのを我慢しながらアキオに聞いた。

「ゲームクリアの条件って、ウッド・ベルが言ってた、『八十八ヶ所逆回り』のこと？」

「そう、それだよ。まずはゲーム参加メンバーに選抜された。これで第一関門は突破した。」

で、この第一関門を突破したやつは今どこにいるのか？

大きく分けて二つのグループに分けられるだろう。

まずは、ウッド・ベルの警告を無視し、四国に残ったもの。

もう一つは四国を出ようと三つの橋に向かったが間に合わなかったため、運よく生き残ったもの。

前者は各々自宅付近にいるだろう。そして後者はそれぞれが向かった橋の近くにいるだろう。

この中で正しいスタート地点にいるのは……」

「あつ、おれらだ！おれらだよ！四国お遍路八十八ヶ所目はたしかこっちのほうだよ。なあそついうだろ？」

「そう八十八ヶ所目は香川県さぬき市にある大窪寺。

三つの橋の位置で見ると、瀬戸大橋と鳴門大橋がこの大窪寺に近くなる。

3分の2の確率だが、今治を選んでなくてよかったよ。

ゲーム参加人数が195万ってなつてたけど、実質すぐに大窪寺に動ける人間、広くみても今香川県にいるもののみ正式な参加メンバーになるんだろうな」

「なんか今日のヒデなんか違うね……」

ふとつぶやいたマツナミの声が聞こえた。

確かにいつものおれと違うのは自分でもわかっている。

だが、抑え切れない程の鼓動が全て自分の力へと変わっているような気がした。

「さて、大窪寺に向かうか」

4月10日 新潟 米問屋事務所

8:00

今日も朝から『ウッド・ベル』のニュースばかりだ。

寒い冬がやっと去ろうかという中、身も心も温まるような話題はないものか。

会社は売上、売上。

テレビをつければ『ウッド・ベル』、『ウッド・ベル』。

『ウッド・ベル』が登場し、渋谷だけならまだしも、四国が閉鎖されてしまった関係で会社の売上はうなぎ登りだ。

上司の機嫌もいい。

ただ、休みもなく働かされる現場の身にもなってもらいたい。

所詮、会社の売上が上がっても現場の給料には反映されないのだから。

今日も一時間仮眠をとっただけ。

日本がこんな状況でも仕事だけは待ってはくれない。

「今日も部長に怒られに行くか」

気合いを入れて米を保管している倉庫へと向かった。

「今日もこれ全部運ぶのか…これだけの量をこの時間で運べっか」

「ケイスケはまだいいほうだろ。おれはこれだよ」

同僚のスズキが山積みの米にもたれかかって言った。

「みんなびびって食料のまとめ買い。せつかくまとめ買いしても『ウッド・ベル』が現れて毒ガスまかれたら意味ないのにねえ」

スズキはそう言うが、おれも実は四国の件があった次の日にスーパーでカップ麺やら缶詰やらをまとめ買いしていた。

ブー

ブー

「ん、また緊急速報か」

四国でのことがあってから、何かあると携帯に緊急速報が流れるよ

う
に
な
っ
た。

「そういえば今朝のニュースでやってたけど、あの日に四国から出た人昨日まででみんな死んだらしいね。」

ん？大窪寺が全焼… 同時刻に大窪寺に辿り着けなかったと思われる人達が次々と死亡… だってよ」

「あれから5日経つのにまだ政府は四国に入れないんだろ？なんかよくわからないバリアのせいで」

「翌日に助けに向かった自衛隊が上陸できずに全滅だもんな。おとといは政府の包囲網を抜けて四国に入ろうとしたやつが遺体になって本州に流れ着いたって話だしね」

今四国は完全に封鎖されている。

入ろうにも入れないからだ。

四国内での現在の状況は、今『四国編に参加している』メンバーからの携帯での情報のみしかない。

「まあ、それよりおねらはこの米を運ばないとね」

5
1

4月15日 新潟 ケイスケトラック

8 : 1 8

『 1 2 1 , 9 8 8 , 2 2 6 / 1 3 0 , 0 0 0 , 0 0 0 』

あれから10日が経った。

相変わらずカウンターは下がり続けているが、仕事は忙しい。

今日は一睡もしていない。

朝から米をトラックに運び込み、またいつものルートを走っている。

もう少しで最初の配達先に着く頃だ。

ため息まじりに携帯を閉じようとすると、砂嵐が現れ、文字が浮か
び上がった。

『ノウカノミナサマ、

オハヨウゴザイマス。

キハ、ジユクシマシタ。

ニホンハ、コメニ、ササエラレテ、キマシタ。

イマカラ、ソノコメニ、ホロボサレルノハ、アナタタチデス。

クワレルマエニ、クラエルカ。

…デハ…』

カタツ、カタカタ、カタ

『 コメソウドウ 』

カタ

米騷動

『米』という文字を見たおれは悪寒が走った。

普段見慣れた、日常扱っている『米』という文字を『ウッド・ベル』が使ったことで、身近なところで何かが起こるのでは、という思いがした。

「機は熟したって…」

と、考える間もなく、配達先に着いた。

「まずは目先の仕事終わらせねえとな」

この配達先は四国の件があるまでは日中に運んでいたが、あれ以降納品量が異様に増えたため、オープン前の朝に納品させてもらっていた。

「すいませ〜ん」

搬入口の電気が付き、中で物音がするが鍵を開けてもらえない。

とりあえず荷物を先に降ろしておこうとおれはトラックに戻った。

ガサガサ、ガサ、

ガサガサガサ、ガサ、ガサガサ

「ん？荷台の中から？なんだ？」

荷台の扉に手をかける。

ブー

ブー

緊急速報…？

ハッとしたが、おれの扉を開ける手はもう止められなかった。

黒い塊が開いた扉から一斉に噴き出してきた。

顔面、腹、脚と体全身に襲い掛かる。

半開きになっていた口にその物体が飛び込んできた。

「ゲ、ゲホッ」

吐き出そうとするが、黒い塊の圧力があまりに激しく、身体にまとわり付いていたため、逆に飲み込んでしまった。

トラック内の黒い塊は一時はおれの身体を飲み込んだが、気が付くとおれを中心に四方八方に飛び散って行った。

喉に奇妙な感覚を覚えながら、おれはその場にへたりこんだ。

「…なんだっ たんだ… あれ…」

ブー

ブー

携帯の緊急速報がなり続けているのにやっと気付き、携帯の画面を慌てて開いた。

『8:22 ウッド・ベルによる犯行予告と同時に米から大量の謎の虫が発生。この虫が人を襲い、各地で死亡者が出ている』

『8:30 現在手元にある米は容器に入れ密封すること。スーパー他、米を扱っているお店は店を閉め鍵をかけ避難すること』

ブー

ブー

続けざまに緊急速報が入る。

『8:33 この虫は新潟県産の米のみから発生。5kg一袋分で一人を襲い、食べ尽くした後、その場で死骸となる』

トラックの荷台を見ると、限界まで積んでいた米の姿はなく、新潟県産こしひかり100%とかかれたビニールの袋だけが残っていた。

ふと納品先の店内が気になった。

軒先の電気は朝にも関わらずついていて、店内は薄暗い。

「おえっ」

近付いて見ると、店内は例の虫が飛び回り、薄暗い雰囲気をもし出していた。

店の自動ドアにへばりついているものを見ると、なんとも不気味な容姿が判明した。

ゴキブリとコオロギを足して2で割ったようなみたこともない生き物だ。

大きさは5cmほど。

あの小さな米粒からどう生まれたのか？

「うげっ、おれこんなもん飲み込んだのか…」

店内の奥の方を見ると理科室にあるような骸骨が寝転んでおり、周りには虫の死骸が転がっている。

「おれもあのままだったら、こうなってたのか…そういえば、スズキは…」

スズキに電話をすると無事だった。

スズキのトラックの荷台にはまだ大量の虫が詰まったままであり、そんな状態なので、途中でトラックを動かせなくなっているのとこのだった。

そんなに遠い所ではなかったのでおれは空のトラックでスズキを迎えに行った。

56

9:54

「ケイスケ、よくトラック一杯分の虫に襲われてだいじょぶだったな」

「まあね、何が起きたかわかんなかったけど、なんか助かったよ」

「まさか自分がこんなことに遭遇するとは思ってもみなかったな。新潟県産だけなんだよな、虫が発生したの」

「そうみたいだね。被害はやっぱり新潟中心だけど、全国各地で被害出てるみたいだね」

いまだに緊急速報がなりっぱなしの携帯を見ると、

『110 / 592 / 903 / 130 / 000 / 000』

かなり減っていた。

それだけ新潟のお米が日本人に支持されていたということになるが、逆にそれが悲劇を大きくしてしまったとも言える。

おれとスズキはこの状況で何をどうすればいいかわからず、とりあえず事務所に戻ることにした。

街中には無数の黒い塊が徘徊していた。

地面には所々黒い塊が落ちている。

その隙間からは白い骨のようなものが覗いていた。

スーパーやドラッグストアなどお米を扱っている所はほぼシャッターが降りている。

降りていない店もあるようだが、よく見てみると、おそらく従業員が全滅しているであろうことがわかった。

民家も同じく人の気配がなく、生活の跡だけがそのまま残されている所が多い。

中にはおれらと同じように助かった者もいたが、力無くその場にうずくまっていた。

おれは普段は15分で駆け抜ける道を40分かけて事務所へ戻った。

10:50

事務所に着くとワタナベ所長と事務のクサカベさんが外にいた。

「おつ。おまえらよく無事だったな。詳細はさっき電話で話した通りだ。急にだったからな…」

事務所と米保管の倉庫はくつついていた。

そんなに大きくない事務所だったが10名が事務所で犠牲になった。

ドライバーはおれとスズキ以外はまだ連絡が取れていないらしい。

「この音聞こえるだろ。忌ま忌ましい音だよ」

倉庫からはガサガサを通り越して、ゴォーという音が聞こえる。

振動で倉庫が破壊されそうな程の轟音だった。

「所長、ケイスケのやつ一旦あの虫に襲われたのに生きてたんすよ。トラックに積んでたやつ全部に襲われたのに無事だったんすよ。ホントに奇跡っすよ、奇跡」

「あいつもか。いや、事務のクサカベさんも一回は取り囲まれたのに喰われずに済んだんだよ。隣のササキくんはあつという間に喰われてしまったんだがね」

「へえ、意外に助かってる人もいるんですね。所長はどうやって助かったんすか？」

スズキがワタナベ所長の機嫌を取りながら話している脇でクサカベさんがおれに耳打ちしてきた。

「所長：みんなを盾にしたんです。あの虫が迫ってきた時に、ササキさんもあたしも逃げようとしたんですけど、あたし達、所長に掴まれて、虫が来るほうに蹴飛ばされたんです。」

あたしは運よく無事だったんですけど、ササキさんは横であの虫に……」

所長らしいと言えば所長らしい。

普段から威張り散らし、機嫌が悪くなるとすぐに部下にあたる最悪な上司だった。

おれはあまりご機嫌取りがうまくないせいでいつも、イライラをぶつける矛先にされていた。

その点、スズキはうまくやっている。

多少は怒られることもあるが、所長からはかなり気に入られている。

スズキは一緒に酒を飲む度に社会でうまくやっていく重要性を毎回毎耳にタコができるほど説いてくる。

「所長が死ねばよかったのに…」

クサカベさんが最後に発した言葉に少し恐怖を感じた。

6
1

4月16日 ケイスケ宅

8 : 0 0

久々に12時間寝た。

ここ二週間、働きっぱなしだったため、体は相当疲れていた。

本来はもう米の配送という仕事はないため、もっと寝れるはずだったが、所長から事務所周りの片付けに來いとこの指令が入ったため、事務所へ行くこととなった。

布団をたたみながら、職がなくなるであろうことと台所の隅においてある米びつのことを考えるとため息しか出てこなかった。

「これから、日本はどうなるんだろ…自分はどうなるんだろ…

…

……自分とクサカベさんはなんで助かったんだろ……」

事務所に着くと昨日のメンバーに加え、おれらと同じドライバーのヨシノがいた。

ヨシノはドライバーの中では一匹狼的な存在で誰ともつるまない。

所長といいヨシノといい、人間的にどうかと思うやつばかり助かっていてなんだかあまり気分はよくない。

「さあ、掃除始めろ」

いつものようにこいつは命令するだけで一切自分ではやろうとしない。

「もうちょっとスピード上がるだろ。なんとか今日中には綺麗にしてくれよ」

結局、倉庫周りと事務所周りの虫と白骨を片付けるのに丸二日かった。

この間に、この虫に対する対処法が見つかった。

それは『水』だった。

人間の約60%は水分であり、この虫はその水分が体の中に、ある一定量たまると動けなくなり死ぬとのことだ。

そしてこの虫は『人喰い虫』と名付けられていた。

「おい、みんな集まれ」

三日目の解散時、所長がとんでもないことを口にした。

「事務所には大事な書類がある。取引先にも早く連絡しなきゃならん。人喰い虫が水で退治できることもわかったことだし、事務所に入って必要な物を取ってくるとしようか」

おれは最初反対したが、書類さえ手に入れば給料を払えるとの言葉に流され、事務所への突入を決心した。

64

4月18日

13:00

「突入の際の確認だ。よく聞いとけよ。まず今回の目的は事務所内の重要書類を手に入れることだ。

ただ、現状は窓から見えるように中は人喰い虫が充満している。事務所と倉庫をつなぐドアが開いているからだ。

まず、事務所内のやつをやっつけ、そのドアさえ閉められれば、もう事務所に人喰い虫が入ってくることはない。

いいか、わかったか？じゃあ、担当を発表する。まずは…先頭はおまえだ」

所長の指先はまっすぐおれを指していた。

「えっ？おれですか？」

「そうだ。ここにホースが2本ある。このホースで水をまきながら中に入るんだ。二番手はヨシノ、おまえが行け。」

スズキとクサカベさんは事務所の入口のドアを開ける係だ。万が一外に人喰い虫が出てくるようなら入口に用意してあるバケツの水を使ってくれ。

最後におれはここで蛇口の開け閉めをやる」

「えっ、所長は中に入らないんですか？」

「当たり前だろ。ホースは2本しかないんだ。だいたいおれがいなきゃ指揮するやつがないだろ」

確実にハズレくじを引かされた感じがした。

やはり所長はくそだ。

しかし、だれかがやらないといけないことなので諦めて自分がやることにした。

一旦襲われたのに大丈夫だったこともあるので、それを含め意外と緊張感は湧いてこなかった。

13:59

「さあ、準備はいいか？14時になったら作戦開始だぞ。

…

…

さあ、カウントダウンだ。10、9、8、7、6、5、4、3、2、
1、ゼロ。ドア開ける！！」

合図とともに事務所の入口のドアが開けられた。

中にいた人喰い虫は、今までなかった所に急に空間が現れたため、一瞬動きが固まったが、一斉に新しく開いた空間へ進もうとした。

そこへすかさず、おれとヨシノがホースで大量に放水を始める。

情報通り、水を浴びた人喰い虫はバタバタと床に落ちていった。

おれはおれの生活を目茶苦茶にされた恨みを晴らすべく、飛び回っているやつにも、もう力尽きて床に這いつくばっているやつにも容赦なく水を浴びせた。

ほぼ入口付近を制圧したと思ったとたん、急にヨシノが事務所に飛び込んだ。

「ばか、まだ中にはいっぱいいるんだぞ。くそっ！」

ヨシノの単独行動におれも突入しなければならぬ雰囲気になった。

多少恐怖はあるが体は動くようだ。

「うおおー」

おれは叫びながら事務所に突っ込んで行った。

事務所内は真つ黒の塊で覆われていた。

足元は退治した人喰い虫の死骸が山になっており前に足を進める度に膝下まで埋まる。

もちろん靴の中もいやな感触であふれかえる。

目的は事務所と倉庫をつなぐドアを閉めることだ。

先に突入したヨシノの後を必死で追い掛ける。

ヨシノに襲い掛かる人喰い虫に必死で水を浴びせる。

ヨシノの単独行動があつたものの事務所の半分くらいの所までは順調に來ている。

「ヨシノ！もう少しだ！がんば…おい、なんだよ、これ…水が…」

来た道を振り返ると人喰い虫の屍の山の向こうに所長が慌てふため

く姿が見える。

所長の足元にはホースの端が転がっている。

「くそ！あのカスが！ヨシノ！引き上げ……」

ヨシノにもう水が出ないということを伝えようとした瞬間、急に前からヨシノが現れ、突き飛ばされた。

おれは人喰い虫の山に倒れ込みながら叫んだ。

「くそー！どいつもこいつもくそやろブブブ」

最後の言葉は襲ってきた人喰い虫に覆われ、言葉にならなかった。

一度体験した黒い塊の圧力に懐かしさすら感じるほど、体に力が入らない。

さすがに今回はだめか。

でも、いつか。

おれのために泣いてくれる人もいないし…

クサカベさん…

黒い塊の圧力はどんどん増していく。

喰われて死ぬのが先か、それとも押し潰されて死ぬのが先か。

どうせ喰われるなら死んでからのほうが苦痛が少ないのかな。

いろいろな事を考えているうちに不思議と体の神経が全てなくなり、唯一動く脳みそだけが自分になっていく気がした。

死ぬ時はこうやって死ぬのかあ、意外と楽に死ねるんだなあ、と安らかな気持ちになって行くおれの脳みそに誰かの声が侵入してきた。

「おい、大丈夫か！」

その言葉を脳みそではなく、耳でキャッチした瞬間、おれの神経は脳みそからそれぞれの故郷へ戻って行った。

おれ本来の体に戻ったおれは全身がびしょ濡れになっていることに気付いた。

「おい、大丈夫か？大丈夫なら、手伝え。おれ一人じゃ限界がある」

そう淡々と話す声は、ヨシノだった。

ヨシノの手にはポットややかんが握られており、それで水をばらまいていた。

「給湯室の水道を使え。水は出しっぱなしにしてある。コップや皿しかないが自分で考えてどうにかしろ。おれ一人じゃ全部は無理だ」

ヨシノはおれの上に覆いかぶさった屍を足で振り払い、給湯室に水を確保しに戻って行った。

「また生き残った…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0983z/>

日本国民参加型ゲーム

2011年12月26日21時10分発行